

義務観劇

このがら空きの劇場はどうしてなのだ？ 観客が来ないからに決まっている。誰の責任か？ 国のだ。どうして義務観劇が導入されないのだ？ もし誰もが劇場に行かなければならなくなったら、事情は一変するはずだ。どうして義務教育が導入されたのか？ もし行かないでもいいのだったら、生徒は誰も学校へ行かないだろう。劇場にだって、容易ではないだろうが、ひよっとするとやっぱりそれほど難しくはなく、導入できるかもしれない。固い意志と義務はあらゆることを可能にするものだ。教育に可能であるのに、劇場は駄目ということがあるだろうか！

子供からも義務観劇を始められるだろう。子供劇場の演し物は、むろんメルヘンだけで構成されよう。『ヘンゼルとグレーテル』とか『狼と七人の白雪姫』とかの。

大都市には百もの学校がある。それぞれの学校は日に千人もの子供をかかえている。つまり十万もの子供がいる。これらの十万もの子供が毎日、午前は学校に行き、午後は劇場に行くとする。子供一人につき入場料が五十ペニヒ、もちろん国の費用で。百の劇場がそれぞれ座席数、千。すると劇場一件につき五百レンテンマルク 劇場百件で五万レンテンマルクだ。

そうすればどんなに多くの俳優が仕事にありつけることだろう。義務観劇が地域全体に導入されれば、経済生活全体が新たに活気づくだろう。「きょうは劇場へ行こうかな」といつのと、「きょうは劇場に行かなければならない」というのでは、まったくちがう。義務観劇がきっかけになって国民は自分から他のくだらぬ夜の娯楽にも出かけるようになるかもしれない。ボウリング、トランプ、飲み屋での政治談議、デート、果ては『黒い男を恐れよ』とか『仕立屋さん、女房を貸しておくれよ』などの時間の無駄の愚かしい遊びに至るまで。

観劇の義務があると もはや作品を選択する必要がない。きょう『トリスタンとイゾルデ』を見に行こうかどうか悩まなくていい。とにかく見るしかないのだ。義務だから。

劇が好きだろうが嫌いだろうが、年に三百六十五回、劇場に足を運ばなければならぬ。生徒も学校へ行くのにぞっとしても、出かけて行く。そうするし

かないから。義務！義務づけることよつてのみ、今日、人々の足を劇場に運ばせられるのだ。口で何だかんだ言つてみても、この何十年、ほとんど効果は上がらなかつた。暖房のきいた観客席だとか、幕合に庭で喫煙できますとか、学生や軍人は全員半額だとか、こんな優待措置では劇場を満杯にはできなかつた。大劇場では年間数百マルクもかかる宣伝費が、義務観劇になればいっさい不要だ。同じく、座席別の値段もなくなる。なぜなら、座席はもう階層別ではなく、観劇する人の障害と欠陥に応じて分類されるからだ。

平土間の一〇五列は難聴ならびに近視の者。

平土間の六〇十列は心気症患者ならびに神経衰弱患者。

平土間の十〇十五列は皮膚病ならびに感情疾患患者。

階上席および天井棧敷は喘息患者ならびに通風患者の利用に供される。

ベルリンのような都市においてはすなわち乳児および八歳以下の子供、

寝たきりの者および高齢者を除いて毎日、約二百万人が義務観劇者となる。

これは現在の自主的観劇者の人数をはるかに越える数字である。

自発的消防団で同様に苦い経験を数々味わいそのあげくにやっと、今日では消防団参加は義務づけなければならぬと悟つた。

消防団できて劇場できないことがあるのか？まさに消防団と劇場は今日では大変密接につながつてゐるのだから。私は長年にわたる裏方としての

舞台活動において、消防士の出でこない芝居というものを見たことがない。

提案している「一般的劇場訪問義務」、略して「般劇訪義」が実施されれば、先に述べたように、毎日二百万人が劇場に行かなければならないから、ベルリンのような都市においては二十の劇場がそれぞれ十万人分の席を用意する必要がある。あるいは四十の劇場がそれぞれ五万人分の席を、あるいは百六十の劇場がそれぞれ一万二千五百人分の席を、あるいは三百二十の劇場がそれぞれ六千二百五十人分の席を、あるいは六百四十の劇場がそれぞれ三千二百二十五人分の席を、あるいは二百万の劇場がそれぞれ一人分の席を。満員の劇場の雰囲気は本当にすばらしい。五万人ものお客が入つてゐるとする、役者なら誰もこの気持ちができるだろう。こうした強大な権力手段によつてのみ、がら空きの劇場を立ち直らせることができるのだ。無料入場券によつてではないいや、もう強制しかない。そして、国民を強制できるのは国だけだ。